

わが交友抄(89・10・12 東京分館)

故 三好 基之(昭14文甲)

今、此の会(三高十二日会)の世話役、板倉先輩からお話がありました様に、どうも私は職歴をみても、何かいろんなことをごちゃごちゃやっていますので、焦点がはっきりしないという、どうもお叱りとも、からかいとも云う様なご発言を頂いたんですが、今日はお集まりも少ない様なので私もほっとしております。与えられた題も、「わが交友抄」という、これ又非常に焦点のない様な話をしろということなのですが、こんな題で話をしますと際限がなく、男の話ばかりでなくて女の話もせにやいかんという様なことになりますと数限りなく無限に広がって参ります。その辺は一つ遠慮さして頂いて、私が戦後二三・四年頃から亡くなられる四七年頃までの約二四・五年間仕えました水野成夫という男がいるので、敬称はこれからも略しますが、この水野のことの一部をお話申し上げてお茶を濁したいと思えますので、一つよろしく。戦後にご承知の様に大変な混乱期で、当時戦前の財界、財閥を中心にした財界なんてものは、すっかり解体してい

たわけで、私は二十年の十二月に兵隊から帰って来ましたが、翌年になって、私がほんの籍だけ置いていた船会社なんかは、みんな、わけのわからん様になってしまい、こんな船会社にいても先がどういふことになるかわからないと思ひ、少し勉強でもしようかと殊勝な心を起しまして、経済団体に入ろうかと思ひ、それで経済団体のボスの所へ行つたんです。

そのボスは今、経済団体なんて云つたつて目茶苦茶だ。全部、解体命令が出て解体してる最中なんで、とてもそんな経済団体なんて人なんか入れられないという様な話だつたわけですね。丁度そういう時に、昨日、奇しくも亡くなつた郷司浩平という人がいまして、今、葬式に行つて来ましたが、郷司さんが経済同友会という団体を作るのいふので、そこに来ないかという話が出まして、渡りに舟で、まあそこへ行つたわけですね。その事務局にずっといたわけです。当時、そういう混乱期ですから、戦時中にあつた重要産業協議会とかいふ様なものも解体して、その中で同友会というのが出来た。それが確か二一年の四月だつたと思ふんです。

経済同友会というのは経済団体といつても、これは個人的な同志の団体で業種別の利益団体じゃないわけなんで、そういう団体が出来たのです。そしてそこに私は入つたわけです。そこで初めて水野成夫という人物に会つたわけです。当時、水野さんにご承知の様に昔は共産党の中央委員をしておつて、特高につかまつて八年位牢に入つてたわけですね。志賀義雄とか、ああいう連中と丁度一緒におつた。そして、獄中から転向して出て来たわけですね。その時に書いた天皇論

とかあるらしいんですが、それは読んだことないんですけれども、転向して、その後文筆家等をやっておつて、皆様ご承知の様に、*「神々が渴く」*とか、*「ああいうものを翻訳して、それは、まあ浅野晃と二人でやってたわけですね、浅野晃と二人で滋賀の山の家にもつて、二ヶ月位で翻訳したという様なことを云っていましたが、そういう文筆活動を戦後、約十一年間位やって、そのうちに昔の共産党の同志の南喜一というおっさんがいまして、この親父さんが新聞紙を特殊な溶液でインクを取つて再生するという発明をしたと称しているんですが、これが本物かどうかは最後にしてわからないんですけれども、そいつを事業化しようということになつて、当時の軍部の連中にもたきつけて、その関係で日本再生製紙という会社を作つたわけです。*

その再生製紙というのは、終戦当時の軍務局長をしていて、最後の日米の交渉にも参加した親父さんが非常に懇意にしてくれまして、会社が出来たわけです。その会社を作るについて、機械を当時の占領中の広東から持つて来るといふ様なことで北海道の勇払といふ苦小牧の隣のさびしい所に工場をぶつ建てた。そして、その再生製紙といふのを始めたわけです。それで、どうやら、こうやら紙が出たんですなア。そういうことやつてるうちに、一方、国策パルプといふ会社があつて、その国策パルプといふのは、宮嶋清二郎といふ当時の財界の重鎮で、これが非常に何といふか、変つた人物が好きで、昔、共産党の大山といふソ連で死んだのがいて、これも非常にかわいがつて援助してたとか、いろんなことがあるんですが、これが非常に、水野、南をかわいがり

まして、そんな様なことから、国策パルプと再生製紙を一緒にしようという様なことになって、一緒になったわけです。国策パルプというのは、人絹パルプを作ってる会社なんです。再生製紙というのは紙だけなんです。それが一緒になって、国策パルプ工業というのになって、人絹パルプと紙を両方作る。この旭川の工場というのは非常に大きな工場で、私も国策に入った時は、ヤミ会社じゃないかと思つていたんですが、工場みてびっくりしたんで、これは、まあ大変な大きな工場なんです。そういう工場がはじめて出来たわけです。そんなことで、水野というのは、宮嶋清二郎に大変可愛いがられたということが、いろんな財界活動する縁の一つになつたと思う。話が前後しますが、私は同友会というのに入つておつて、二十一年末頃ですかね、当時労働運動の方でも争議ばかりやつては仕様がないうんじやないか、少し、生産の再建をやる必要があるんじやないかというんで、当時総同盟の高野実とか、産別の細谷某とか、そういう連中が経済復興運動というのをやらないかという様な話があつた。それに同友会がのつて、経済復興會議という會議を作つたんですね。二十二年間に。その事務局の仕事等しておつたんですけども。しかし経済復興運動というのはスローガンはよかつたのですが、実際は何も出来なくて、一年位で解散しちゃつたわけです。その時には、経営者側代表では藤井丙午、当時、まだ参議院議員じゃなくて、日鉄にいたわけですけども、藤井丙午とか、永野重雄とか桜田武とか、そういうのが、いろいろ出てやつたわけで、その時は水野成夫というのは、まだあんまり出てなかつたですな。復興

会議の後を受けまして、日本経済再建会議というのを作って、やっぱりこれも高野実をまつた。それから電機労連の落合英一とか、それから、同友会の何人が集まってやったわけです。それは、どうもスローガンばかりでは仕様がなないので、具体的な問題をやろうじゃないかということで、東海道線の電化運動をやろうじゃないかということで、なんで電化運動が出て来たか、よく覚えてないですが、稲葉秀三を事務局長にしてですね、私は稲葉さんの下にいたんですが、やろうじゃないかというんで、進駐軍の当時CTSといった、そこらに働きかけてですね、米原までの電化運動を何とか実現しようじゃないかと、いろいろCTSのグットマンというアメリカの小さな駅の転輸士あがりのおっつあんみたいなのがいてですね、お前ら、一体、電機に関係のない男が、どうしてこんなことをやるんだ、どうしても分らんんだ。それでその連中を料亭にご馳走したりなんかしてですね、やったわけだけど、結局、まあ許可は下りたわけですね。それで日立やなんか非常に感謝されたんだけど、その電化運動は浜松まで、まず第一に出来たわけですが、そんな運動を、まあやったわけなんです。

そんなことやってるうちに、水野から私に当時、丁度、日清紡と国策と大原総一郎の倉敷レーヨンですね、この三社でビニロンの工場を作るという計画がありましたね、ビニロン作るんだから、その会社に来ないかという話がありましたね。私、初めてのことで、おもしろいから行きましようかといっ行ってたんですが、丁度朝鮮事変が始まって景気が非常に悪くなっちゃって、

それで取り止めになり、それじゃ仕様がなから国策パルプへ来いって云うんで、私は実は国策パルプへ入ったわけですね。その会社に約四、五年いましたか。国策パルプへ入って水野の秘書みたいな仕事を何年か続けたわけですね。

その当時、国策パルプってのは、ご承知の様に三白景気の頃ですね。儲かって儲かって仕様がなからですな。とにかく紙がない時代ですから新聞社から何から、皆んな紙くれ紙くれと来るわけですね。売りやあ全部ヤミですからね、金が余って仕様がなから。当時、私はうる覚えですけども、半期で表へ出したのが十九億位儲かったんですね。それ以外にヤミで、まだ何億も儲かってるわけですね。だから重役室へ行きますとね、当時のことだから目茶苦茶ですわね。ロッカーやなんか十萬円の束が上に一杯積んであるわけですね。南喜一なんか、僕もたまにね、〃オイお前ら、これ、持って行け〃というんで十萬円の束くれるわけですね（笑い）それ程にね目茶苦茶に儲かったんですね。南喜一や、みんな死んでるから云うんですけど、南喜一の自宅なんかへ行くと地下室があつてね、そこに札が一杯、山の様に積んであるわけですね。それ程ね、儲かったんですね、紙会社というのは。だから、毎日、宴会みたいにやってるし、大変なさわざだった。だから、そのうちにおかしなヤミ会社じゃないかと思つていたんですけども、そんな様なことがあつたんです。

朝鮮事変以後、非常に不景気になつてパタンとそういう景気が止つてしまつちやつたわけなん

でねエ。それから、オーバープロダクションになって、みんな、四苦八苦したわけですが、まあ三・四年は終戦直後から二六〇七年頃までは大変なことだったですなア。その当時、それ程、儲かったわけですけれども、その儲かった金を、いろんなことで使ったわけですが、当時、ほとんど毎日の様に宴会してた様な気がするんだナ。財界のお歴々を呼んで、当時の藤原銀次郎とか、ああいう連中です。そういう連中を毎日の様に、ご馳走してねエ、呼んでたわけですわ。そういうことが、一つは非常に、水野成夫売り出しのアレになったんじゃないかと思うんですが、そういうパルプのヤミ景気が非常に力になって、いろんな財界に進出する一つの力にはなつたんじゃないかと、私は思うんですが、水野成夫はそういう意味で、そういう背景があつたんですけれども、前歴が前歴で、みんな一目、置いてたんですね。人間的には非常に魅力と云いますか、非常にぎつくばらんで開けっ広げの人間で、しかし、又、一面非常に慎重な所がある非常に複雑な人だつたんじゃないかと思うんですが、そういう魅力があつたんで、割にみんなに好かれて当時の爺さん連中ですね、今、云つた藤原銀次郎とか財界の連中と云えば、昔の経団連の錚々たる連中に、みんなかわいがられた人でした。

そういうことをやってるうちに、池田勇人というのが、吉田さんに非常にかわいがられたんですね。吉田さんに非常にかわいがられたと云うのは、どういふことかと云うと、先程、申し上げた宮嶋清二郎というのが非常に吉田茂と親しかったんで、宮嶋清二郎が、水野・南というのを非

常にかわいがつて、水野を吉田茂に紹介したわけですね。それで吉田さんに会つてゐるうちに、吉田さんも水野を非常に気に入つてかわいがつてくれたと思ふんですが、そんな場から吉田茂と親交が出来、それから吉田の子分の池田とか佐藤というのは、丁度、水野と高等学校は違ひますけれども、丁度、同年代で池田が大蔵省の何課長をしてた頃ですかねエ、丁度、水野が今の再生製紙を作る頃という様な事で、昔から知つてたわけですよ。それが、戦後、大蔵大臣とか、又総理になつたわけなんです。そういうことから、池田をめぐる四人の中の一人に数えられるまでになつたわけですよ。当時さわがれた地獄会というのには池田・水野・堀田庄三、それから桜田・東畑精一なんてのがいましたねエ。それから小林忠、これ位で、丁度猪地獄だと云うんで、地獄会を柳橋の亀清で毎月一回位づつやつてたわけですが、その地獄会というのが、非常に有名になつちやつたんですけれども、そういう会合を毎月開いて、池田の話なども聞き、池田にいろんな注文をつけたりなんかしてやつてた程、親しくなつたわけですよ。

その後、佐藤なんか池田に続いて、佐藤の後援も非常にしてたわけですが、私が産経の編集部長をしてる頃、丁度、佐藤内閣が出来た時だったんですけれども、その佐藤内閣が誕生する日のニュースなんか、私なんかより水野の方が、よく詳しく知つてゐる様なことがありますよ、当時、丁度、佐藤内閣が成立する前夜ですか、私は朝日の三浦とかなんかと赤坂のおでん屋かなんかで深夜、飲んで、これはまあ、明日は、社の紙面は佐藤内閣でいこうという様なことで、

話してやってたんですけれども、帰って十二時頃だったと思うんですが、うちは佐藤内閣ということでしょうと云ったら、朝日の早版は、佐藤じゃないということを一面で書いてたんですね。それは、どうしてかと云うと、当時、丁度、三浦が赤坂のおでん屋なんかで飲んでる時に、盛んに三浦が中曾根に電話したりなんか、おでん屋から電話してるんですよ、僕らの目の前で。それで盛んに、いろんな情報とって、何んだかんだやってましたけれども、結局どうして、ああいうことを書いたのか、よくわからないんですが、初版でそういうこと書いて、後で、二版位から訂正して、佐藤ということに書いたんですけれども、それで、三浦が政治部しくじっちゃって、政治部を結局辞めて、テレビ朝日へ行くという様なことになったわけです。

あの時の事が、今だにどうも忘れられないんですが、そういう事件があったんですけれども、佐藤のことについても、水野が非常に後援して、池田に続いてやってたわけですね。丁度、だから高度成長が終って、田中角栄にいく頃から、水野は大体、田中角栄というのが、ええ、あんまり好きじゃなかったんですね。まあ、どうしてかと、よく云ってましたけれども、例えば赤坂の料亭なんかで田中角栄は、机の上に丸ノ内の地図でも拡げてですね、財界のお歴々を呼んで、おメエの所にはこれやる。おメエの所にはこれやる、てなことを堂々とやってたんですね。国有財産をやるってなことを、芸者なんかも聞いてあきれてたわけですね。そんな角栄ってのは、そんな面があるんで、あけっぴろげと云えば開けっぴろげやけど、非常に軽はずみと云えば軽はずみ

の様な所があるんで、非常にそういう点は、水野は確かにきらってたですけれども、角栄の時代になってから、余り水野は政治のことに関係しなくなつたですね。それは同時に、水野が段々、やっぱり年もとつてくるし、力が段々と衰えて来た、ということにもなるだろうと思つてます。

当時、同友会のできた頃の頃から、皆、一緒にやって来た連中が一人去り、二人去りで、段々いなくなつて、現在生きてれば、九十幾つだろうと思つてすけれども、水野が四七年に死んだ時だつて、仲間で生きてるのは、堀田さんは今でも生きてるわけですけれども、堀田さん位じゃなかつたかと、そういうわけで、僕もいろんな人間に会つて来たんですが、人間的にいろんな魅力という点では、やっぱり水野成夫というのが、一番魅力があつたんじゃないかと思つてます。それに次いで、人物的に一番おもしろいと思つたのは、小林中という人が、非常にやっぱり偉いんじゃないかという感じがするんですが、これは宮沢喜一なんかも、そう云つてますけれども、小林中というのは、非常に人物的に戦後、財界で一番優れてたんじゃないかという様なことを云いますが、それはどうしてかと云うと、いろんなことがあるわけですけれども、僕は一番小林中というのはおもしろいナと思つたのは、丁度、水野成夫が病氣になつて、産経を引退する時ですが、産経の借金やなんかの処理の問題をいろいろやったわけですけれども、当時、永野重雄とか堀田とか鹿内とか今里とか、そういう連中が、五・六人集まつた席で、借金なんかを一体どうするかという様なことを話したことがあるんですけれども、その時も小林中というのは、自分は銀行出

身なんだけれども、「お前、そんなこと、いちいちよくよすることねエじゃないか、銀行なんてのは、借金なんて、幾らでも待たせりやあ、いいじゃないかってなことを堂々と云ってましたんで、私も、小林中ってのは、おもしろい男だなと思って、感心したことがあるんです。なかなか剛腹というか、開発銀行の総裁になった時から、私等もちよく会いましたけれども、あれは、とにかく戦後、番町会時代から二十幾つの時から、ああいう様な活動をした男なんです、それだけ場数も踏んでるし、肝玉も坐ってるんでしょ、ね、余り教育も大して受けてないが、仲々おもしろい人物じゃないかという風に私は思っただけです。

それから南喜一というオッサンがいますが、これは、まあ昔、これも共産党で、弟は今でも共産党でいるはずですけども、戦前の女郎解放史とか、いろんなこと云われて、亀井戸の女郎を解放したとか、いう様なことやった人物ですが、これも、教育なんてほとんど受けてなくて、自分じゃ早稲田の薬学部を出たなんてことを云ってるけど、これが果して本当かどうか、だれもわからない。しかも、先っき云った様に、紙の再生を発明したとか云うけれども、これも、だれも信用してるヤツ、余りいないわけですね。しかし、これ又、仲々場数を踏んでるだけあっておもしろい人物だったですね。例えば、私とその水野成夫と南喜一と三人で、長沼弘毅という昔、大蔵省にいた次官がいた。例の探偵小説のポーなんか訳してるオッサンですね。これが戦争中、さっきも話した様に、広東から紙の再生の機械を持って来る時に世話になったんですね。それで長

沼弘毅というのには非常に世話になったからというんで、時々呼んだりなんかして、それで丁度、柳橋の亀清で長沼君を呼んで、私もなんで来たか、わからんけども、とにかくそこで飲んでたわけですね。丁度、当時東京に大雪が降った時ですよ、それで何だか飲んでるうちに、南喜一が「オイ、長沼弘毅なんてのは、つまらん男や、お前、こんなところで話しても仕様がなから、三好、一緒に行こうじゃないかと云うんで、後、水野にまかして二人だけやらして、二人でどこかへ行こうじゃないかと云うんですよ。私はそうもいかんでしょうと云うんだけど、行こう行こうというから仕様がなから、「水野さん、頼みますよ」と云って、出て、それで、どこへ行くんかと思ったら、これから吉原へ行くんだと云うんで、大雪の中を、車がこんなになってるのに行つてですなア、とうとう二人で吉原に泊っちゃったんですよ。そしたら翌る日、起きたら、ものすごくいい天気なんだけれども、車が、雪で全然動かないわけだ。それで南喜一と二人で、足をびしょびしょにしながら、地下鉄まで行つてですな、雷門まで。地下鉄で有楽町の国策パルプへ行ったら、大雪でだれもいやしない、人が。それで「これ、アホみたいナ」と云って、二人で大笑いしたことがあるけど、南喜一というたら、彼女が六・七人いましてね、彼女を毎日の様に渡り歩いてるわけです。本人は〇〇町に家があるんだけど、家にだれもないもんだから、ずーと歩き廻ってるんです。

いつか、風邪ひいて、全然、会社にも出て来ないもんだから、どこにいるんかと思つて、いろ

んな所へ、電話かけるんだけど、さっぱりわけがわからんわけですナ。そのうち一人の女の所に、フーフー云って寝てたわけですナ、風邪ひいて熱出して。彼はね、七度五分位熱あると全然ダメなんですよ。それで私が彼女の家へ訪ねて行ったら、フーフー寝てござったですわ。又、私が車でいつも会社まで行く時に通る所に、ヒョットと見たら、南美容院というのが、ある日、忽然として出来たんですね。そして、南さんの車が近くに停ってたわけですよ。こりゃあ、おかしいナと思つて会社へ聞いて「あなた、あの辺に何か又、作つたんじゃないか」と聞いたたら、「いやあ、実はそうだ」と云うんですよ。女に美容院を作らせて、そこに自分が行つたわけですネ。エ。南つて云うのは、そういうわけで、女は何人もいるけれども、必ず、その女のめんどろは全部みると。死ぬまで、皆みるといふ様な所がありました、そういう点は感心な所があつたですネ。エ。

私のつまらん話は、これ位にして、ご勘弁願います。

(元産経新聞副社長・三島製紙(株)社長)